

## 研究室の窓から

かのうちに、人生の終末に達成感や充実感を味わいたいものなのだろうか。いつ終わりになるか誰もわからないし、長生きしても認知症になってしまったら、自分の名前はおろか人生を振り返るところではないのではないだろうか。

実は、昨年で五回目の干支を迎えたのだが、誕生日から一ヶ月後のある日、手にした葉書の文字がほんやりとしか見えず、思わずメガネを外してしまった。も

## 十九年間を少しだけ振り返って

湯澤直樹

### □ 歳をとって

このところ学生のレポートを添削していると、「歳をとって悔いのない人生だった」と思えるようにがんばりたい、という表現が目につく。それはそれで良いのだが、最近是自己自身が歳を実感し始めたせいか、このことが気になっている。それにしても、二十歳になるかならない

いやることは難しいものである。

もちろん、学生が良い人生を過ごしたいと願うのは健康的な考えであり、添削したレポートは「現代社会と就職」という科目で、様々な経歴・職種の方々による一回きりのオムニバス形式の講義であり、就職の助言にとどまらず、講師の人生観や足跡を話していただいているので、毎回新鮮な刺激を受けている学生が講師のような人生を歩みたいという感想は至極当然なのである。とはいえ、その年齢の時にやれることがあるはずなのだから、その時その時に全力を尽くすことができれば、それで良いのではないかと思う。お願いした講師の方々も、そうして歳を重ねてきた結果を話していただいで、それに学生達は感銘を受けているのである。

### □ 原稿用紙にメモ

この講義では、特製の原稿用紙を使っている。十数年前に同じ教材を同じ学生

に縦書きと横書きで書いてもらうことを何度か試した時、真情を吐露していたのは圧倒的に縦書きであった。それに比べると、横書きは実に味気ない内容のものが多かった。そこで、である調や三段落四百字以上など七つのチェック欄を設けた一行二十五字で三十二行の縦書きの原稿用紙を作って、今日に至っている。

受講にあたっての約束事のひとつに、講師の話の聞いている間は、この特製原稿用紙のマス目は一字も埋めず、空いている所にひたすらメモだけをとってもらっている。原稿用紙の裏ではなく表のスペースにメモを書くことを汚すことだと思っている学生や教員も少なくないが、それは汚すことでも恥ずかしいことでもなく、レポート作成になくはならない準備であり、むしろ「美しい」と思っている。情報源は定かでないが、「情報を受け取ったまま何もしなければ、その倍以上のスピードで放出されてしまう」ということを信じているので、常にメモす

ることを癖にするように、口酸っぱく言い続けている。

#### □ 思いを文字で吐き出す

心に残ったことは大切にすべきである。講義やビデオが終わった直後の第一印象を文章化すれば、言いたいことはぶれないと思っっている。この科目でも、講師の話が終わった直後に強く残った印象を書き留めて、それを柱にメモを肉付けして十分間で文章を即製する訓練となっている。

最初のうちは、二〜三行程度しか書けなかった学生も、個人差はあるが、講義回数が五回を越える頃には十数行は書けるようになり、十回前後経過すると見える内容になっていく。添削していて、学生が自身の成長を実感しているのがわかる。次元は低いかもしれないが、量が質に転化する瞬間に立ち会っている気がしている。

実は、この講義の終わりまでに回収し

た添削していないレポートを、すぐにコピーして講師へ手渡している。中には誤解を生むような表現もたまにあるが、包み隠さず真先に講師に見てもらっている。講師の方々のバラエティに富んだ話の中に共通して見られる「無私」の部分に学生達が反応して正直な思いを文字で吐き出すので、講師に失礼なレポートは皆無である。逆に、受け取ったレポートを宝にしていると言っていたら、講師の方々からの支持があるうちは、心配無用だと思っっている。

この職に就いて十九年になるが、こうして講義のやり方はあまり変えずに頑なにマイナーチェンジを繰り返してきただけかもしれない。ＩＴ化が進めば進むほど、手書きというアナログな部分の重要性を実感している。

#### □ ＩＴ化

それでも講義をＩＴ化する流れには抗し難く、むしろ歳による衰えをＩＴ化に

よって補ってもらっている。学内LANが整備されたと同時に導入されたWeb Tubeを授業に取り入れてたことは、その一例である。これは、学生参加型の授業を前提に、活発な意見交換や多様な考えが得られる環境を実現するウェブ上の学習支援システムである。これを三年前から積極的に使い始めたのは、物忘れが激しくなったせいである。それまでは、授業のたびに出席簿を手書きしてEXCELで管理していたが、その出席簿を失念することが頻発するようになった。そこで、出席簿を自動的に作成できないか、なくなることがないようにできないかと思案していたら、Web Tubeが目にとまった。これで楽できると思った。

それまでの原本の作成・印刷・配布・回収・採点の手間を大幅に省くことができた。最初に学生に登録させて名簿ができれば、後はその都度、問題を作成して、開始と終了の時間などを設定すれば、学生がその場で自己採点していつでも振り

返ることができるようになった。これまでは事前に人数分印刷しておかなければならず、もったいないのでプリントを余らせなくなかったので、紙を使わないことは気が楽になった。

#### □ コラムを使った小テスト

しかし、新聞のコラムから十個程度の漢字を読み書きの問題にする場合、これまでは空欄にして問題番号をつけて印刷するだけであったが、解答する学生もパソコンのIME (Input Method Editor) 日本語入力機能を使用するので、少し工夫が必要になった。

漢字の書き取りで、同音異義語など変換して複数の候補がある場合は、まさか間違えないだろうがとりあえず問題にしてみると、引っかかる学生が少なくないので、IMEの裏をかくようになってしまった。

文中に何度も同じ言葉が出てくる場合は、前後の文脈から判断してふさわしい

言葉を考えねばならず、単純な漢字の読み書きにとどまらないので、問題としては面白いが、小テスト中や自己採点中に声に出す学生が増えたのには困っている。

コラムを使った小テストは、内容にもよるが、だいたい10分程度で問題は完成する。回収もなく、それだけしかかからない。小テストは五分間の設定なので、だいたい始業から十分過ぎには皆終了している。すぐに問ごとの正解率の円グラフと誤答のリストが出るので、センターモニターで全員に見せながら、この位はできて当たり前だとか、コラムの内容に勝手なコメントをしたりと十五分ほど経過して、本論に入っていく。正直、こうしたことを当たり前のように毎回こなす学生には頭が下がる。学生時代を振り返ると、そんな真面目ではなかった。

講義科目によつては、コラム以外に、前回までの復習を兼ねた内容や、その科目につながる内容の小テストを用意して

いる。もちろんその科目の進捗度を問う問題も作成している。それ以外に、科目に関連して、空き時間にもできるような問題や自習できる内容のものも用意している。いつどの程度がんばったかは学生自身で振り返ることができるし、担当教員としても講義時間以外にもがんばったことを把握できるのは良いかもしれない。ただし、研修等で本来なら休講になる場合でも、Web Tubeを使って自習にすることが可能なので、学生には迷惑な話かもしれない。

最後に、この文を書くにあたって、職に就いてからの十九年間を振り返る機会となったことを感謝したい。前を向いてドンドン進むことも必要だが、立ち止まって振り返るのも悪くなかった。

北翔大学短期大学部